

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「サイゼリヤ、お釣をAmazonギフト券で受け取ると2%分増額。都内6店舗」
- 2) 「ヤフーが社食に“揚げ物税”導入 揚げ物を値上げして社員の健康増進」
- 3) 「難病患者が遠隔で接客、会話も“ロボカフェ”開店」

---

### 1) 「サイゼリヤ、お釣をAmazonギフト券で受け取ると2%分増額。都内6店舗」

イタリアンレストラン「サイゼリヤ」は、「飲食代金のお釣をAmazonギフト券で受け取れるサービス」を都内6店舗で実施。現金払いでお釣をAmazonギフト券で受け取ると、2%分増額されたギフト券を受け取れる。

日本橋浜町店、秋葉原アトレ2店で7月より実施していたサービス。利用者からの好評を受け、10月上旬より、高田馬場南諏訪通り店、高田馬場早稲田通り店、ビッグボックス高田馬場店、高田馬場駅前店を追加し、計6店舗で開始した。

サービスの利用は、会計時に「お釣りはAmazonギフト券で」と伝えることで、Amazonギフト番号が印字されたレシートが渡される。このギフト番号をAmazonに登録して利用できる。

例として挙げられているのが、299円のミラノ風ドリアを1万円札で支払うケース。この際、お釣りは通常9,701円となるが、Amazonギフト券で受け取ると2%増額の9,895円分が受け取れる。この場合、194円分が増額されるので、ミラノ風ドリアが実質105円になるとしている。

対象となるのは、飲食代金合計金額が200円(税込)以上、かつお釣り金額が9,800円以下の利用者。個別会計時には利用できない。2%乗じた金額の小数点以下は切り捨て。発券されたAmazonギフト券の返金、換金は不可。またギフト券の再販売は禁止している。

たった2%かもしれないが、使い方によってはかなりお得になるのではないだろうか。Amazonを日常的に利用する人にとっては嬉しいサービスだ。同様のシステムで、Amazon以外にも活用できるのではないだろうか。キャッシュレス化が加速している今、現金支払いのお釣りを電子マネーで、という新しい仕組みの広がりが予想される。

---

### 2) 「ヤフーが社食に“揚げ物税”導入 揚げ物を値上げして社員の健康増進」

ヤフーは社員食堂に「揚げ物税」を導入すると発表しました。揚げ物を一部値上げし、その値上げ分で魚料理を値下げするとしています。

揚げ物税は10月8日から社員食堂「BASE11（ベース ジュウイチ）」で導入。揚げ物料理の一部を100円値上げし、魚料理を150円値下げします。例えば同日の日替わりメニューでは、「チキン南蛮～自家製タルタルソース～」が591円から691円に、「鯖の味噌煮と具沢山けんちん汁」が693円から543円になります(税込)。

同社は実施の背景として、社員がランチで脂質を取りすぎる傾向にあり、揚げ物料理を食べる社員が多いことを挙げています。魚料理の食数を増やして社員の健康増進を支援することを目指すとしています。

オフィスでの健康増進がこれまで以上に注目されている中、大幅な金額改定で様々な意見があると思う。お昼の1食が、毎日魚中心の食事をしている人の「たまの揚げ物料理」かもしれないし、一概に揚げ物だけを値上げするのは批判の声もあがりそうだ。食べたものをデータ化し、連続しすぎている日だけ値上げするなど個々にあったシステムがあればもっと社内環境は良くなるかもしれない。

---

### 3) 「難病患者が遠隔で接客、会話も“ロボカフェ” 開店」

重い病気などで外出が困難な人が、ロボットを自宅で遠隔操作して接客するカフェが7日、東京・大手町の大手門タワー・JXビル1階に期間限定でオープンした。寝たきりの人の社会参加の可能性を広げるのが目的。昨年11-12月に続き、2回目の開店となった。

ロボットの操作は、国内外に住む17-58歳の男女30人が行った。

店内では全長1メートル20の「OriHime (オリヒメ) -D」がスムーズな動きで飲み物を運んだ。

参加者は、「五輪のボランティアをしたい」「私のツイッターを見て」など、マイク機能を使って客との会話も楽しんだ。

全身の筋力が衰えていく難病を患う永広 証人さん(26)は2回目の参加。「前回、体調が悪くなった時は、他の人が操作を代わってくれた。今回も助け合いながら頑張りたい」と話した。

カフェは23日まで。チケットは売り切れたが、キャンセルが出た場合は当日券を販売する。来年の東京五輪・パラリンピック中の開催も計画している。

重い病気+ロボットと聞くと「病気の人を介助するため」と想像してしまいがちだが、これはその逆であり、こうした使い方もあるのかとハッとさせられた。今はインターネットがあれば世界中の景色を見たりいろんな情報が得られるが、この例のように身体が不自由でも社会との関わりが「リアル」に持てる機会がもっと増えれば良いと思う。また、病気の人だけではなく子育て中で働きに出られない人や事情があって外で働くことが困難な人にも応用できそうだ。遠隔で手術ができる時代、簡単な仕事であればもっともっと広がるのではないかと思う。